

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	年寄名と四股名にみる大相撲の心理
Author(s)	佐藤, 暢治
Citation	ニダバ , 27 : 149 - 154
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048039
Right	
Relation	



年寄名と四股名にみる大相撲の心理

佐藤 暢 治

0. はじめに

周知のように、漢字には音読みと訓読みがある。この音読みと訓読みの区別については、かつては出自の違いを、つまりは音読みが漢語を表し、訓読みが和語を表すとされてきた。しかし、近年は、音読みと訓読みの区別は必ずしも出自と一致するわけではないという見方が有力である。

音読みと訓読みの使い分けにおいて注目されることは、ひとつには、そこに無意識のうちに日本人がおこなう心理的な区別が反映されていることである。音読みには話し手が対象を心理的にソト感覚で捉えていることが反映され、訓読みには話し手が対象を心理的にウチ感覚で捉えていることが反映されている。

大相撲における親方の年寄名と力士の四股名は、「舞の海」や「貴ノ浪」などに見いだせる「の」や「ノ」を除けば漢字で表される。そのため、年寄名と四股名に使われている漢字が音読みされるのか、それとも訓読みされるのかを探れば、音読みと訓読みから読みとれる日本人の心理的な区別を通して、大相撲というものが日本人によってどのように捉えられているのかが垣間みえてくる。

そこで、この小論では、大相撲の年寄名と四股名に焦点をあて、それが日本人がもつ音読みと訓読みの心理的な区別とどのように関わっているのかを検討する。そのときには、「一島」と「一山」といった語構成をもつ年寄名と四股名を取上げることにする（「一島」には「一嶋」も含むものとする）。それは、「一島」と「一山」は元来地名に認められるものであり、そこでの音読みと訓読みの区別は年寄名と四股名の考察においても興味ある結果をもたらすからに他ならない。

1. 音読みと訓読みの心理的な区別

大相撲の年寄名と四股名をみていく前に、音読みと訓読みの心理的な区別というものがどういうものであるのか、確認しておこう。牧野(1996:121)は、音読みと訓読みの心理的

な区別に関して、次のように述べている。

このこととの関連で興味深いのは、日本人は同じ概念を音読みしたときのほうが、訓読みにしたときより心理的な距離を感じる。言い換えると、音読みはソト感覚を、訓読みはウチ感覚を、それぞれ表しているということがあります。このことは、例えば「山」を「大雪山」「八甲田山」「磐梯山」「富士山」「阿蘇山」のように「サン」と音読みする場合は、一般に高くて威厳を感じる人が多いのに対して、「函館山」「兜山」「大文字山」「嵐山」「三原山」のように「やま」と訓読みをする場合は、何か近づきやすい、親しみのある山と感ずることからもわかります。また、「国後島」「択捉島」「色丹島」「奥尻島」「礼文島」など「トウ」と音読みする島は文字どおり遠い島で、「佐渡が島」「大島」「八丈島」「種子島」「三宅島」「淡路島」と訓読みするときは、遠い島でも、何か親しみを感ずることと符合します。

要するに、和語は通例ウチ的共感を表し、漢語はソト的で非共感を表すのです。

この牧野の見方は、十分に支持できるものである。ここで、興味深い例をひとつみておきたい。

数年前のことである。プロ野球の広島東洋カーブにドラフトされた高橋英樹投手は、名前もさることながらその出身地で一躍有名になった。その出身地というのは、南西諸島の1つ「喜界島」である。当初、マスコミは、この島の名前を「キカイトウ」のように「島」を「トウ」と音読みでよぶことが多かったが、やがてこの島の呼び方は地元の人がよぶとおり正式名称である「きかいじま」へと変わっていった。

この現象は、まさに日本人がもつ音読みと訓読みの心理的な区別を反映するものといえる。すなわち、こうである。歴史上、「喜界島」は流刑地として有名な島である。しかし、マスコミを始めとする多くの人にとって、「喜界島」という島は文字通り遠い島ということもあったが、初めて耳にするような知らない島であった。そのため、しばらくの間人々はこの島をウチ感覚を表す「しま」を使って「きかいじま」とよぶことに心理的に抵抗感を覚え、ソト感覚を表す「トウ」を使って「キカイトウ」とよんだのである。

ただし、「山」の音読みと「島」の音読みの間には違いもある。それは、先述の牧野からも窺えることであるが、「山」の音読みには「島」の場合とは異なり、威厳が感じられることである。同じ音読みであっても、「山」の「サン」には威厳が感じられ、「島」の「トウ」にはそれが感じられがたいという点は注目してよい1現象である。

では、こうした音読みと訓読みの心理的な区別は、大相撲における親方の年寄名や力士の四股名とどのように関わってくるのであろうか。「一島」と「一山」という語構成をもつ年寄名と四股名を例に考察していこう。

2. 大相撲の年寄名と四股名

大相撲の年寄名と四股名をみてみると、年寄名の方はその数は限られ、しかも18世紀中葉には既に現在に伝わるもののほとんどが出そろっていたが、四股名の方は力士が増えればその分だけ新しい四股名が生まれるといっても過言ではないという違いがある。そのためであろう、ときには桃太郎、赤鬼、青鬼などといった一風変わった四股名も生まれている。

現在、年寄名の数は定数の105と一代年寄の大鵬と北の湖を含めた107であるが、力士の総数は大見信昭 銅屋志朗編(1997)『完全大相撲力士年鑑 平成九年度版』によると幕内・十両・三段目・序二段・序の口を併せて867人である。つまり、四股名の総数は867である。しかし、後に明らかになるように、どのような四股名でも大相撲の世界において受容されるというわけではないようである。大相撲の年寄名と四股名は、簡単にいえば、開かれた体系と閉じた体系のなかで存在するもの、つまりは大相撲という閉じた体系の上で開かれた体系を構成する年寄名と四股名が存在しているといえるものである。もっとも、こうした開かれた体系と閉じた体系のなかで存在するという点は、大相撲の年寄名や四股名に限らず名前であれば何にでもあてはまる一般的なことなのかもしれない。

では、年寄名と四股名において、「一山」と「一島」がソト的に音読みされるのか、それともウチ的に訓読みされるのかを、年寄名、四股名の順に検討していこう。

まず、年寄名の107のうち、「一山」という語構成をもつものは19名跡認められる。そのすべてが「一やま」と訓読みされ、「一ザン」と音読みされるものはひとつもない。「一やま」と訓読みされる19の年寄名すべてを掲げておく。

浅香山（あさかやま）、朝日山（あさひやま）、大山（おおやま）、音羽山（おとわやま）、鏡山（かがみやま）、春日山（かすがやま）、甲山（かぶとやま）、桐山（きりやま）、佐ノ山（さのやま）、綴山（しころやま）、芝田山（しばたやま）、立田山（たつたやま）、楯山（たてやま）、出来山（できやま）、常磐山（ときわやま）、二十山（はたちやま）、秀ノ山（ひでのやま）、二子山（ふたごやま）、侍乳山（まつちやま）、

一方、年寄名の107のうち、「一島」という語構成をもつものは2名跡認められる。「一山」の場合と同様に、その2名跡とも「一しま」と訓読みされ、「一トウ」と音読みされるものはひとつもない。

高島（たかしま）、錦島（にしきじま）

従って、年寄名の場合、「一山」と「一島」とも訓読みされ、音読みされる名跡はない

ことになる。つまり、年寄名は、もっぱらウチ的に捉えられ、ソト的には捉えられていないことになる。

次に、四股名の場合をみてみよう。四股名の場合、年寄名とは少し事情が違うようである。「一山」という四股名は、全四股名867のうち111四股名認められる。そのうちの76四股名は訓読みされ「一やま」であるが、そのほかの35四股名は音読みされ「一ザン」である。ただし、「一やま」と訓読みする76四股名のうち10四股名は本名と同じである。「一山」を「一やま」と訓読みする四股名のうち、本名と同じものを除いた66四股名すべてを掲げておく。

青樹山（あおぎやま），秋ノ山（あきのやま），東山（あずまやま），伊藤山（いとうやま），桜見山（おうこやま），大崎山（おおさきやま），大鷹山（おおたかやま），阿武山（おおのやま），大葉山（おおばやま），小濱山（おばまやま），魁の山（かいのやま），勝平山（かつひらやま），克己山（かつみやま），川上山（かわかみやま），旭晃山（きょっこうやま），金開山（きんかいやま），金翔山（きんしょうやま），護国山（ごこくやま），越ノ山（こしのやま），琴乙山（ことおとやま），琴ノ山（ことこのやま），琴平山（ことひらやま），桜井山（さくらいやま），佐々木山（ささきやま），佐貫山（さぬきやま），杉の山（すぎのやま），泉州山（せんしゅうやま），前進山（ぜんしんやま），大亀山（だいきやま），大志山（たいしやま），太萌山（だいほうやま），高瀬山（たかせやま），龍乃山（たつのやま），鶴眞山（つるまやま），東心山（とうしんやま），徳王山（とくおうやま），栃ノ山（とちのやま），突進山（とっしんやま），智貴山（ともきやま），虎伏山（とらふすやま），中島山（なかじまやま），中野山（なかのやま），中邑山（なかむらやま），平城山（むらやま），橋本山（はしもとやま），服部山（はっとりやま），英彦の山（ひこのやま），平野山（ひらのやま），広瀬山（ひろせやま），福興山（ふっこうやま），福東山（ふくとうやま），松本山（まつもとやま），峰山（みねやま），武魁山（むかいやま），武双山（むそうやま），睦龍山（むつりゅうやま），武哲山（むてつやま），山中山（やまなかやま），雷神山（らいじんやま），利尻山（りしりやま），龍花山（りゅうかやま），隆気山（りゅうきやま），龍勝山（りゅうしょうやま），流星山（りゅうせいやま），和歌乃山（わかこのやま），和田山（わだやま）

そして、「一山」を「一ザン」と音読みする35四股名は、次のとおりである。

朝闕山（アサトウザン），魁松山（カイショウザン），魁青山（カイセイザン），魁嵐山（カイライザン），覚東山（カクトウザン），関東山（カントウザン），

旭鷲山（キョクシュウザン）、旭天山（キョクテンザン）、旭道山（キョクドウザン）、旭竜山（キョクリュウザン）、旭鬼山（キョッキザン）、元祐山（ゲンユウザン）、豪天山（ゴウテンザン）、五剣山（ゴケンザン）、秀光山（シュウコウザン）、勝天山（ショウコウザン）、青銅山（セイドウザン）、壯堅山（ソウケンザン）、大勝山（ダイショウザン）、太平山（タイヘイザン）、玉天山（タマテンザン）、潮光山（チョウコウザン）、千代天山（チヨテンザン）、天龍山（テンリュウザン）、徳豪山（トクゴウザン）、浜天山（ハマテンザン）、福天山（フクテンザン）、北天山（ホクテンザン）、都天山（ミヤコテンザン）、雷山（ライザン）、雷天山（ライテンザン）、力天山（リキテンザン）、龍天山（リュウテンザン）、龍東山（リュウトウザン）、若豊山（ワカホウザン）

一方、四股名のうち、「一島」という語構成をもつものは15四股名認められる。ここでは、「一山」の場合とは異なり、「一トウ」と音読みされるものはひとつもなく、そのすべてが「一しま」と訓読みされる。ただし、そのうちの6四股名は本名と同じである。ここでは、それを除いた9四股名を掲げておく。

安芸乃島（あきのしま）、梅島（うめしま）、琴中島（ことなかしま）、佐賀乃嶋（さかのしま）、佐田の島（さだのしま）、敷島（しきしま）、濱ノ嶋（はまのしま）、藤ノ嶋（ふじのしま）、若八嶋（わかやしま）

従って、四股名の場合、「一山」は音読みされることもあるが、「一島」は訓読みされるだけとなる。この違いは、先にも述べたように、「一山」を「一ザン」と音読みする場合には「一島」を「一トウ」と音読みにする場合とは異なり、対象の威厳を表せえるからである。つまり、「一山」をソト的に「一ザン」と音読みすることで、力士がもつ「ちからびと」としての威厳を表せるからである。しかし、年寄名に「一山」を「一ザン」と音読みするものはない。元来、四股名にも「一山」を「一ザン」と音読みするものはなかったのかもしれない。

ここで、大相撲の年寄名と四股名における「一山」と「一島」が、ソト的に音読みされるのか、ウチ的に訓読みされるのかを、まとめておこう。次のようになる。

1. 年寄名の場合、「一山」と「一島」は、常に訓読みされ、ウチ的である。
2. 四股名の場合、「一島」は常に訓読みされウチ的である。しかし、「一山」は訓読みに比べると使用頻度はやや低いが、力士の威厳を表すためにソト的に音読みでも使われる。

このことを、「一山」と「一島」という名前の視点からもまとめておく。

1. 「一山」は、年寄名では常に訓読みでありウチ的であるが、四股名は力士の威厳を表すためにソト的な音読みでも使われる。
2. 「一島」は年寄名・四股名に関わりなく訓読みされ、ウチ的である。

このように、年寄名に限らず、四股名にしても心理的にウチ的に捉える訓読みが好まれる。大相撲における年寄名や四股名というのは、個人でいう名前にあたるものであり、親方あるいは力士一人一人のアイデンティティを表すものである。そして、そのときには大相撲の世界においてふさわしいとされる名前が好まれるはずである。そのため、四股名は年寄名に比べれば、はるかに自由に創作できるとはいえ、力士の威厳を表すという明確な動機づけがなければ、「一山」を「一ザン」と音読みするような四股名が生まれていたかどうかとも疑問になってくる。年寄名にそれが無いのは示唆的である。また、「一島」を「一トウ」と音読みするような四股名をもつ力士は、「一山」の「一ザン」に感じられるような威厳もないため、将来においても現れないと思われる。もし仮に、将来「一島」を「一トウ」と音読みする四股名が現れたとしても、広まることはないであろう。

3. おわりに

以上、大相撲の年寄名と四股名に用いられている「一山」と「一島」を例に、それらがソト的に音読みされるのか、それともウチ的に訓読みされるのかを通じて、大相撲が年寄名跡と四股名をどのように捉えているのかをみてきた。

今回ここに取上げたのは、「一山」と「一島」だけであった。しかし、四股名一般について次のようなことを指摘したとしても、指摘しすぎということはないであろう。おそらくソト的な色彩をもつ四股名は四股名としての明確な動機づけがない限り使われないか、たとえ仮に使われたとしても広まることはなく一時的なものにすぎない、と。

参考文献

- 大見信昭 銅屋志朗編(1997)『完全大相撲力士年鑑 平成九年度版』ザ・マサダ
牧野成一(1996)『ウチとソトの言語文化学 文化を文法で切る』アルク
田中克彦(1996)『名前と人間』岩波新書